

機関番号：14401

研究種目：基盤研究(C)

研究期間：2008～2010

課題番号：20520500

研究課題名(和文)到達度評価制度構築のための「国際基準」に準拠した
ロシア語総合試験開発研究課題名(英文)A development of comprehensive examination in Russian that is compliant
with international standards to formulate the proficiency assessment system.

研究代表者

林田 理恵 (HAYASHIDA RIE)

大阪大学・大学院言語文化研究科・教授

研究者番号：70185651

研究成果の概要(和文):大阪大学外国語学部ロシア語専攻における過去7年間のロシア語検定試験試行結果を分析,学習者の技能別・問題内容別習得度と各年次教育カリキュラムとの相関性を調査・考察し,本学教育システムに適合し得る「国際基準」に準拠した(CEFR基準A1～B1の3レベル)文法・語彙,読解,聴解,作文,口頭発話の5領域の総合試験を作成,本学「授業支援システム WebCT」をLMS(学習管理システム)として活用した試験実施システムを開発,またパフォーマンステストにおける本学独自の客観評価法を確立した。

研究成果の概要(英文): We analyzed trial results for the Russian certificate exams from Osaka University in the past 7 years. The results were from the department of Russian in school of foreign studies. Each year, we investigated and considered the correlativity of the educational curriculum and the levels of acquirement of the learner depending on their skills and the contents of the question. We created a comprehensive examination that contain the following 5 different areas; grammar/vocabulary, reading, listening, writing and oral communication. The examination is compliant with international standards (A1, A2 and B1 of CEFR standards) which can be adapted to our educational system, and also established our own objective evaluation method for the performance testing.

交付決定額

(金額単位:円)

	直接経費	間接経費	合計
2008年度	700,000	210,000	910,000
2009年度	1,000,000	300,000	1,300,000
2010年度	1,400,000	420,000	1,820,000
年度			
年度			
総計	3,100,000	930,000	4,030,000

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：言語学・外国語教育

キーワード：ロシア語教育,到達度評価制度,国際基準準拠,ロシア語総合試験,試験システムのWeb化

1. 研究開始当初の背景

(1) 2001年,欧州評議会によってCEFR: Common European Framework of Reference for Languages(ヨーロッパ言語共通参照枠-以下CEFR)が発表されて以来,長年の欧州の言語教育研究の知見に基盤をおいた先端的な

"Can-Do statements"("～ができる"というコミュニケーション能力記述)形式の言語能力レベル評価システムが国内外で大きな注目を集めてきた。CEFRは外国語教育のシラバス,カリキュラム,教科書,試験の作成,および学習者の能力評価時における共通基準

としてその「包括性」「明示性」「一貫性」が高く評価され、日本国内でも国際交流基金がCEFRを参考に「日本語教育スタンダード」を開発、慶應義塾大学外国語教育研究センターなどでもCEFRの基本コンセプトの一つである複言語主義(plurilingualism)に着目した「複言語・複文化能力開発プロジェクト」が進められた。しかしながら、これらの取り組みは理念・枠組作りの段階に留まっており、具体的な言語能力レベル評価システムの構築にまでは至っていなかった。

(2) ロシアでは1999年、ロシア連邦教育省によってCEFRに準拠したロシア語検定試験が開発されているが、大阪大学外国語学部(旧大阪外国語大学外国語学部)ロシア語専攻では、到達度の客観的評価システム確立に関連してこのロシア語検定試験に着目し、評価システム確立へ向けた基盤整備の一環として2000年よりこの検定試験に準拠した統一試験の試行を行ってきた。

(3) 上記のような事情の下、7年間の本学の試験結果データ分析を行い、本学の教育環境の実情に即した4年間の教育課程全体の到達度評価システムとして、ロシア語総合試験の開発の必要性が高まっていた。

2. 研究の目的

(1) 本研究は大阪大学外国語学部ロシア語専攻に対して求められている「国際的に通用する高度なロシア語運用能力の育成」という目的達成に向け、

7年間のロシア語検定試験試行結果データの分析による本学ロシア語教育の「国際的統一基準」による質的評価と問題点の明確化、

(1)の分析結果、さらには本学の教育環境の実情を踏まえ教育課程4年間全体の到達度目標設定および各年次への段階的目標配分案の作成、

ロシア連邦教育省主催ロシア語検定試験をはじめとする国内外における国際的統一基準による語学検定試験内容の検討、実施状況・問題点の調査、

(1)-(3)の調査・分析結果をふまえ、到達度評価システムを支える各学年総合試験を開発し、その実施を制度的に保障するWeb化をはじめとする独自の試験制度体制の確立という具体的な目的をもっている。

(2) 本研究の成果として予定される「国際基準」に準拠したロシア語総合試験開発及びそれをベースとした到達度評価システムの構築は、国内のロシア語専門教育課程としては初の取り組みであり、「高度な専門性をもつロシア語運用能力を有した人材育成」という教育課程の目標達成に不可欠な外国語教育システム化事業として、重要かつ焦眉の課題である。このような「国際性」「透明性」をもつ総合試験開発と到達度評価制度構築と

いう成果は単に、

教授法・教材をはじめとした本学ロシア語教育カリキュラム全体の改善につながるだけでなく、

日本の大学における外国語教育全体に対して「国際的基準に照らした外国語教育課程」の初の具体的事例の提示となるものであり、さらにそのような提示を通じて

日本における外国語教育のあり方ならびに、教育内容の質的改善をも呼び起こすものとなる。また

国際基準に準拠した総合試験開発とそのWeb化はロシア語のみならず他の諸言語の共通試験開発にも応用でき、さらに

国内のロシア語共通試験実施の拠点としてそのノウハウを他の教育機関に普及することが可能となる。

3. 研究の方法

(1) 過去7年間の大阪大学外国語学部ロシア語専攻で蓄積された5技能(文法・読解・聴解・作文・会話)のロシア語検定試験結果データについて、技能ごとに平均点、中央値、標準偏差値等の推移及び問題項目別難易度を分析し、学習者の技能別・問題内容別習得度と各年次教育カリキュラムとの相関性を調査・考察。

上記のデータ分析に基づいて、それまでのロシア語教育カリキュラムの「国際基準」による質的評価と問題点の明確化。

(2) CEFR, ALTE, アメリカの National Standards や ACTFL をはじめとして国内外の外国語教育スタンダードについて、それまでに蓄積した情報、知見等をもとに比較検討し、その結果を参考に本学ロシア語専攻の実情に見合った客観的尺度・枠組みとしての独自の到達度目標案を作成、各学年におけるその具体化としてのカリキュラム案を立案。

(3) ロシア連邦教育省主催ロシア語検定試験についてロシア本国での実施状況・問題点などの現地調査・情報収集。その他、日本国内で実施されているロシア語能力検定試験(東京ロシア語学院主催)や ACTFL の OPI (Oral Proficiency Interview), ドイツ語技能検定試験, TOFLE など国内における国際的統一基準による語学検定試験内容の検討、実施状況・問題点の調査。

(4) (1)-(3)の調査・分析に基づき本学ロシア語専攻の教育システムに適合し得る「国際基準」準拠の総合試験開発を各技能領域・各レベルについて実施。

(5) 総合試験の実施を制度的に保障するためのWeb化作業と客観的評価法について独自システムの確立。

4. 研究成果

(1) 大阪大学外国語学部(旧大阪外国語大学

外国語学部)ロシア語専攻で過去7年間にわたって試行的に行われた5技能(文法・読解・聴解・作文・会話)のロシア語検定試験試行結果について、技能ごとに平均点・中央値・標準偏差値等の推移及び問題項目別難易度を分析し、学習者の技能別・問題内容別習得度と各年次教育カリキュラムとの相関性を調査・考察した。

(2)上記の結果を踏まえて現行の専攻教育カリキュラムの「国際基準」による質的評価と問題点の明確化を行い、本学ロシア語専攻の実情に見合った客観的尺度・枠組みとしての独自の到達度目標案を作成、その具体化として各学年でのカリキュラムの第1次素案を策定した。

(3)大学内既存サーバー・コンピューター及び「授業支援システム WebCT」をLMS(学習管理システム)として活用するための環境整備を行い、7月・2月期の2回、テストケースとして利用者登録・問題登録・技能別試験試行を実施、いくつかの改善すべき問題点を明らかにした。

(4)ロシア語総合試験聴解問題開発に向け音声資料の収集を行った。学生が聴いて興味のもてる素材を扱い、専門家としてロシアの俳優に豊かな表現力をもった活舌のよい録音をしてもらうこと、の二点を留意点として遂行し、実際の授業ですでに教材として導入しその効果・改善点を確認した。

(5)ロシア連邦教育省主催ロシア語検定試験について、平成21年9月、10月の2回にわたってロシア・モスクワ(9月)、サンクトペテルブルク(10月)において実施状況・問題点などの現地調査・情報収集を行った。

(6)(5)の調査結果及びこれまでに蓄積した知見に基づき本学ロシア語専攻の教育システムに適合し得る「国際基準」準拠の総合試験開発作業を進めた。具体的には国際基準(CEFR基準)A1~B1の3段階レベルについて、文法・語彙、読解、聴解、作文、口頭発話の各技能領域試験第1次素案を完成、1年次第1期末、学年末、2年次学年末にそれぞれ試行テストを実施し、その結果の分析、検討、問題点の明確化を行った。

(7)また、前年度のデータ分析結果等も踏まえ、本学ロシア語専攻独自レベルとしてA2-B1の中間レベル試験の開発の必要性を認識、特に目標言語環境のない地域で必要とされる技能の特殊性に注目し、高度な読解・翻訳能力養成のためのカリキュラム編成作業を行い、その到達度を客観的に測る技能試験を開発、2年次カリキュラムの再編成とそれに基づく具体的な授業活動を展開、第1期末に新規に開発した中間レベル試行テスト版を実施し、その結果の分析、検討、問題点の明確化を行った。

(8)前年度に行われた過去7年間のロシア語

検定試験試行結果分析、学習者の技能別・問題内容別習得度と各年次教育カリキュラムとの相関性の調査・考察を含め、上記3点の実施状況、調査・分析結果について「研究成果報告書」としてまとめ、大阪大学大学院言語文化研究科より出版・公表。

(9)ロシア教育省・サンクトペテルブルク大学ロシア語検定試験センター主催「試験システムに関する言語学・方法論セミナー」に研究代表者及び分担者1名、研究協力者である本学外国人教師1名の計3名が参加、CEFR及びALTE基準による言語能力レベル評価システムに関する先端的な国際的議論を通して、これまでの期間で開発してきた「国際基準」準拠のロシア語総合試験の各技能領域における具体的な実施手順確立、高度な技術が要求される「口頭コミュニケーション力」、「作文力」の客観的評価方法に関する知識・情報を得、さらに参加3名が国際試験官資格を取得した。

(10)(9)の調査結果及びこれまでに蓄積した知見に基づき本学ロシア語専攻の教育システムに適合し得る「国際基準」準拠の総合試験を開発。具体的には国際基準(CEFR基準)A1~B1の3段階レベルについて、文法・語彙、読解、聴解、作文、口頭発話の各技能領域試験を作成、2010年度1年次第1期末、学年末、2年次学年末に実施。また昨年度新規に開発した中間レベルについても内容的にさらに精査を行い、改善作業を実施し、その結果の分析、検討、問題点の明確化を行った。

(11)試験作成について、本学サイバーメディアセンターが提供するサーバー・コンピューター及び「授業支援システム WebCT」をLMS(学習管理システム)として活用、利用者登録・問題登録・データ集計・学習履歴管理などを行い、試験実施及び試験結果データ処理・分析の効率化を実現。

(12)日本ロシア文学会、第60回全国大会にて本課題の成果について発表、また日本ロシア語教育研究会主催サマーセミナーにてCEFR、ALTEの到達度評価制度に基づいたロシア語スピーキング、ライティング評価法についての発表を予定。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計4件)

林田理恵、地域の国際化とロシア語教育、「ロシア語教育研究」、査読有、創刊号、(2010)、3-14

林田理恵、「専攻語教育」に今、何が求められているのか、『言文だより』、査読無、第26号、(2010)、7-8

林田理恵, CEFR の具体化 ロシア語総合試験の取り組み, Revue japonaise de didactique du français, 査読無, (2009), 181-182

上原順一, XML を用いたロシア語の語形成電子教材の可能性について, 大阪大学世界言語研究センター論集, 査読有, (2009), 第1号, 63-73

〔学会発表〕(計7件)

林田理恵, マルガリータ・カザケーヴィチ, 到達度評価制度構築のための「国際基準」に準拠したロシア語総合試験開発, 日本ロシア文学会第60回研究発表会, 2010.11.6, 熊本学園大学

マルガリータ・カザケーヴィチ, «ШОП (школа опытных преподавателей)», 日本ロシア語教育研究会サマーセミナー2010, 2010.8.21, 大阪大学

林田理恵, 未来のロシア語教師育成を目指して, 日本ロシア語教育研究集会 2009, 2009.12.20, 大阪大学

マルガリータ・カザケーヴィチ, «И опыт, сын ошибок трудных... - 教師は誤りから学ぶ - », 日本ロシア語教育研究会例会, 2009.8.8, 大阪大学

林田理恵, ロシア語教育の今日と明日, ロシア語教育研究集会 2008 「ロシア語教育フォーラム - 地域の国際化とロシア語教育の必要性 - », 2008.12.6, 富山商船高等専門学校

林田理恵, 専攻語としての外国語教育, 大阪大学言語文化研究科・サイバ・メディアセンター等主催シンポジウム「これからの外国語教育」, 2008.11.11, 大阪大学

林田理恵, CEFR の具体化 ロシア語総合試験の取り組み, フランス語教育学会シンポジウム, 2008.10.11, 京都外国語大学

〔図書〕(計2件)

林田理恵, 大阪大学出版会, 授業づくりハンドブック - ロシア語, (2008), 74-109

林田理恵, マルガリータ・カザケーヴィチ, 藤原克美, 上原順一, 堀江新二, 科学研究費補助金研究成果報告書『到達度評価制度構築のための「国際基準」に準拠したロシア語総合試験開発』 - 1) ロシア教育省「ロシア語能力検定試験」の概要・現状と課題, 2) Этапы развития и перспективы российской системы тестирования ТРКИ, 3) ロシアにおける ТРКИ (ロシア語能力検定試験) テスティングシステムの発展段階と展望, 4) ロシア語専攻1年生の WebCT による総合試験について, 5) ロシア語総合試験結果データとその分析 2年次 2000-2009年度, 6) ロシア語総合試験におけるリスニングの位置づけ 2年生向けオーセンティック教材の開発を中心に, 大阪大学言語文化研究科, (2010), 86p.

6. 研究組織

(1) 研究代表者

林田 理恵 (HAYASHIDA RIE)
大阪大学・言語文化研究科・教授
研究者番号: 70185651

(2) 研究分担者

上原 順一 (UEHARA JUNICHI)
大阪大学・言語文化研究科・准教授
研究者番号: 30252737

(3) 連携研究者

藤原 克美 (FUJIWARA KATSUMI)
大阪大学・世界言語研究センター・准教授
研究者番号: 50304069
(H21 まで分担者, H22 から連携研究者として参画)

堀江 新二 (HORIE SHINJI)
大阪大学・言語文化研究科・教授
研究者番号: 20248181

(H21 まで分担者, H22 から連携研究者として参画)

(4) 研究協力者

カザケーヴィチ・マルガリータ
(KAZAKEVICH MARGARITA)
大阪大学・世界言語研究センター・外国人
招へい教員